

---

## コメント

---

### 長谷川信子 英語教育における母語（日本語）教育の必要性と重要性 ——タスク遂行型言語教育の限界を見据えて

英語教育では「コミュニケーション重視」が言われており、小学校での英語教育なども本格化しつつある。そうした流れの中で、それまでの英語を「体系」として「理解」することを目的とする教育は軽視される方向にある。この論文は、そうした英語教育の現状がもたらしている問題点を具体的に指摘したものである。問題点の例としては、機能語の軽視、日本語からの負の転移といったものがある。こうした現状を克服するためには、英語教育と国語教育、さらには日本語教育の連携が必要であることが説得的に説かれている。(I)

---

### 村上佳恵 「\*友達に会わなくて、寂しいです」 ——「Vテ、感情」の産出に向けて

感情の理由を表すとされるテ形は、「家族に会えて(嬉しい)」のように可能形を使う場合と、「試験に合格して(嬉しい)」のように可能形でない場合がある。この違いの原因は何かという教育現場で生じた自身の疑問を解決するため、著者はこの文型を8分類し、うち2文型で可能形が必要となること、可能形にする理由は自己制御性のない事態とするためであること、そしてこの文型を原因・理由のテ形とは切り離して教えることを提案する。さらに、産出を目指した、学習段階別の学習者向け、および教師向けの解説も提示されている。(M)

---

### 永谷直子 副詞「よく」と「잘/cal/」が表す意味について ——共起する動きの性質と出来ばえのよさの述べ方に 着目して

韓国語話者は「Aさんはピアノがうまい」という意味で、「Aさんはピアノをよく弾く」ということがある。これは、日本語の「よく」と韓国語「cal」が一致していないために起こる誤用であるが、この論文はそうした「ずれ」が起こる原因について論じている。考察の結果、この違いは、「よく」と「cal」が共起できる動詞のタイプの違いに由来することがわかった。日本語教育を志向した対照研究の1つの型として参考になる論文である。(I)

高橋美奈子 カラトイッテ類が介在する文における  
推論否定の表現について

接統助詞的に用いられる「からといって」形式が持つ多様な論理関係を8種類に分類し、詳細に記述した研究。この形式は、推論・判断の否定を表し、後件には否定を伴うとされるが、否定形式が出現しない場合もあること、後件そのものが出現しない例もあること、そうした場合も、文脈から話し手の推論・判断の否定の意図を読み取れることが特徴であることが指摘されている。文レベルを超えた考察が求められる中・上級の文型・文法項目を教師が自ら考え分析する際のヒントになるオーソドックスな研究手法が示されている。(M)

井本 亮 連用修飾関係「大きくV」について  
——学習者の理解とコーパス

「ケーキを大きく切る」「船が大きく揺れる」のように、「大きく」はいくつかの用法を持っている。この論文では、そうした「大きく」の用法に関して、学習者の理解度と難易度調査（わかりやすいと思っているか否か）を調べるとともに、コーパス調査を行っている。その結果、理解度と難易度には概ね正の相関があるものの、「ケーキを大きく切る」のタイプは理解度が低いにもかかわらず、わかりやすいと認識されていることや、日本語学の論点と日本語教育では問題とすべき点がずれていることなどがわかった。日本語学の論点と日本語教育において問題となる点の関係を実証的に論じた好論文。(I)

趙 麗雯 学習者コーパスに見られる「テイナイ」の使用順序  
——縦断的・横断的観点から

「ていない」は形態的には「ている」の否定形だが、使われ方は必ずしも一対一に対応しておらず、学習者にとって難しい文法項目である。この論文では、「ていない」に特化して、用法別に、縦断コーパスと横断コーパスを合わせて学習者の習得状況を考察している。その結果、学習者の母語によらず、「ていない」には一定の習得順序が見られた。特に、母語話者の使用頻度が高い「全面否定」の使用率は低く、インプットの量が必ずしも産出に結びつかわけではないことがわかった。コーパスを用いた習得研究の1つのモデルとなる論文である。(I)

---

阿部由子 動作主体を二格で表示した可能文の使用実態と意味  
——新聞・知恵袋・書籍の比較を通して

可能の言い方として、「Aに(は)BがVられる／可能形」という構文があるとされているが、日本語教育ではあまり取り上げられていない。この論文は、現代日本語書き言葉均衡コーパスのジャンルごとにこの構文の使用頻度を調べたものである。その結果、この構文は文学ではよく使われているが、その他のジャンルでは使用頻度が低く、使われる動詞も限定されていることがわかった。このことから、この構文は日本語教育では中上級で必要に応じて導入すれば十分であると言える。日本語教育の現場の疑問を実証的な形にまとめた好論文。(I)

---

島崎英香 初級日本語学習者のための副詞90語の選定  
——日本語母語話者の副詞の使用実態を通して

初級学習者に必要な副詞を選定するという興味深い試み。初級教科書7種、日本語能力試験出題基準(3・4級)、話し言葉コーパスから抽出した512語を日本語教師が5段階に分け、出現の重なりが多い語と教師の初級判定度が高かった語、合わせて90語を選定した。その中には従来、初級語彙とされなかったものも含まれる。また7種の教科書すべてに共通の語は20語のみ、教科書に使われた延べ119語のうち、話し言葉コーパスに出現した副詞は73語のみ、など、学習語彙選定について考えさせるデータが多々含まれている。(M)

---

尹 惠珍 副詞使用の誤用とその原因について  
——韓国語を母語とする日本語学習者の副詞の誤用例を参考に

韓国人学習者に見られる副詞の誤用の原因を探ろうとするこの研究は、学習者の誤用例に「程度を表す副詞」の誤りが多かったこと、中でも「たくさん」の誤用例が多かったことを指摘。その原因を探るために15種の教材を分析した結果、意味・用法の説明が不足している一方で、文型が強調されすぎていること、そして「たくさん」に対応する韓国語の「많다」のほうが使用範囲が広いことについての記述が十分でないことが誤用の原因であると結論づけた。この成果を学習者に還元し、どのような効果が見られるか、検証が期待される。(M)

## 安藤節子 テモラウ構文の分析

— 母語話者による逸脱の観点から

「国が何とかしてもらうことが重要です。」のような、「てくれる」を使うべきところに「てもらう」を使う「誤用」が母語話者の発話においても観察されることがある。この論文は、テレビ番組などに現れたこのタイプの「てもらう」構文に関する「誤用」を詳しく分析したものである。その結果、このタイプの「誤用」には「即興性」と「与益者への配慮」が関わっていることがわかった。(1)

## 建石 始 現実のコミュニケーションにおける

「～ないでください」とは

— 日本語教師と一般社会人の言語感覚は  
どこまでずれているのか

「～ないでください」の例文として、日本語教師は「たばこを吸わないでください」などを、一般社会人は「気にしないでください」などを示したことから、「両者の言語感覚にはずれがある」とする先行研究に対し、同様のアンケート調査による再検証を行うとともに、コーパス調査、「張り紙」と「取扱説明書」を対象とした書き言葉調査を行い、日本語教師の作例が一般社会人および現実の使用とそれほど乖離がないことを論じる。先行調査の再検証方法、そして「ないでください」の使用実態についても具体的示唆がある。(M)

## 市村葉子 「んだよね」の発話意図を解釈する手がかりとは？

— 発話意図と音調との対応関係に注目して

日本語母語話者は頻用するのに、学習者がなかなか使いこなせない形式がある。「んだよね」もその1つである。この論文では、「んだよね」が持つ3つの発話意図、確認要求、聞き手への情報提示、話し手が自分自身の中で確認中であることを聞き手に示す、が音調によって区別されていることが読み上げ実験によって示されている。文法形式の記述と音声教育の接点となる研究として今後の発展に期待が持てる論文である。(1)

## ラルアイソング タナバット

日本語母語話者とタイ人日本語学習者の

出来事の描写方法に関する対照研究

— 視点表現および視座の置き方の分析を通して

日本語母語話者とタイ人日本語学習者による、自作の8コマ漫画のストーリー・テリング文を分析した。その結果、母語話者は全員が「視座」(どこから見ているか)を統一していたのに対し、学習者は7割が「統一視座」ではあったが視点表現の使用が部分的であること、「複数視座」「視座不明示」も見られ、わかりにくい文章となるおそれがあることが実証的に示された。視点表現を学習する段階で「視座」との関連性を示し、積極的な使用を促すことが有効であろうと述べる筆者の主張が、より具体的に検証されることが期待される。(M)

佐々紘子 日本語と韓国語におけるメタ言語表現の機能に関する一考察  
— 映画・ドラマのシナリオの用例を中心に

シナリオを題材とした、日本語と韓国語におけるメタ言語表現の対照研究により、日韓における言語行動の違いを明らかにした。「冗談だよ」「本当だよ」のような「言語行動の種類や機能を明示的に言及・説明する」メタ言語表現を11種類に分類し、出現頻度は日本語のほうが1.4倍ほど多いこと、中でも「余計なことまで喋っちゃった」のような「発言に対する後悔」の表現は4倍近く出現すること等が明らかになるとともに、メタ言語表現が、従来指摘される「配慮」に加えて、相手のフェイスを侵害する際にも使用されることを指摘している。(M)

王金博 「しかし」と「そこで」の「遠隔共起」から見た  
社説の「開始部」の文脈展開  
— 論文・レポートと比較して

論説文の開始部には一定の「型」があり、アカデミック・ライティングではこうした「型」を意識することの重要性が説かれている。この論文では、こうした「型」の例として、「しかし」と「そこで」が共起する場合を取り上げ、その機能を分析している。読解教育とアカデミック・ライティングをつなぐ方法を示す試論と位置づけられる論文である。(I)

小森万里 アカデミック・ライティングにおける一貫性とは  
— 学習者・教員双方がレポート評価に利用できる  
チェックリストの提案

日本語学習者の作文・レポートに対する評価は、文法的な誤りよりも内容の構成・論理性・一貫性などに関わる誤りのほうが評価を下げると言われる一方で、教師は、学習者自身が文章の一貫性を測れる方策を明示してこなかったのではないか。この反省から、筆者は一貫性の有無を確認するためのチェックリストを作成した。一貫性に関わるチェック項目とそのタイプをそれぞれ6種にまとめ、学習者に具体的に示すこのリストが、どのように活用され、どのような効果をあげるか、その検証も期待される。(M)